

愈々加波山へ、集つた連中は、其社務所を占領して、段々相談をしたけれど、如何に奮闘した所で、十七人ではさうにもならぬ。鯉沼の家を、立退く時に、脊負つて来た、爆裂弾は多少あつても、それ位のことで、如何ともすることが出来ない。幸に其原料が多くあつたから、新に造る事になつた。

それにしても、百發も造れば、原料は、盡きて仕舞ふのだ。種々相談の末「何時迄、山に居た所で仕方がないのみならず、其中には兵糧が盡きて、餓死するの外はないから、寧ろこの撃つて出る」云ふことに決して、其麓に、眞壁町と云ふのがあつて、警察署長をして居たのが、諏訪長三郎と云ふ人であつた。此人の甥が、賢助と云つて後に後藤象次郎暗殺の爲に、東京へ出て来て、品川の宿屋へ泊つて居る中に、棚に載せて置いた、爆裂弾から足がついて捕はれ、禁獄十年の刑に處せられ、石川島へ送られた。其弟が小助と云ふて、日活から國活へ移つて、活動寫眞會社に、大きな施風を巻き起した石井常吉の配下になつて居る。

二十三日の夜になつて、加波山を、下つて来た連中が、此警察署へ、爆裂弾を投込んで、一と騒ぎやつた。後に、一同が捕はれて、裁判所へ廻された時に、面白い書類が澤山あつたが、其中の一つに、眞壁町警察分署長諏訪長三郎から、同眞壁町警察分署長諏訪長三郎宛の、強盗届が出て居る。それは此一同が、警察署へ、爆裂弾を投込み、巡査が驚いて、逃げた後に、飛び込んで来て、署内の箆筒を打壊して、金を奪ひ取り、別に巡査の官服や、サーベル、警察署と書いた提灯などを、持つて行つた。それが強盗である、さういふので、署長の名で、署長の所へ、強盗届が出て居たのだから、實に變なものだ。是は詰り、加波山事件を、國事犯として罰せず、さう迄も常事犯として罰したい、さういふ政府の方針から、こんな馬鹿らしい、届書を書かせたものであらう。

其中に、各縣の巡査が、應援に来て、随分劇しい騒動があり、遅れて駆けつけて来た、同志の中で死んだものもあつた。殊に愛知縣人の平尾八十吉は、まだ漸く十七歳位であつたが、非常に膽の太い、しつかりして居た男であつたが、此戰で討死した。巡査の方にも、死傷者は澤山あつた。結局、一同は、分れ／＼になつて、皆所を異にして

間もなく縛りに着いて、裁判所へ廻されたが、死刑になつたのは、琴田、三浦、杉浦、外に、保田駒吉、小針重雄、富松正安等、横山は、死刑の宣告を受けて、上告中に、鍛冶橋の未決監で病死した。著者が、静岡事件で、入獄した時に、横山の隣室に居て、其最後の状は、今猶ほ眼に見る如く、覺えて居る。最も運の好かつたのは、小林と河野で死刑になるべき筈であつたのが、僅かに一二箇月の相違で、未成年の爲に、一等を減ぜられて、無期徒刑になつた。其後出獄して、河野は、今でも東京に居るし、小林は北海道で、或事業に就いて居る。其他無期有期の刑に處せられて、多くは故人になつたが、裁判の上では、強盗殺人犯として處罰された。是に就ては、一同大不服で、さう迄も國事犯である、さういふて、再上告迄やつたが皆却下されて、常事犯扱ひで、北海道へ送られた。

静岡事件

明治十九年の夏、警視廳が、大活動を始めて、茲に一大疑獄が起つた。それが有名な静岡事件である。抑も、此事件の起因は、前の加波山、秩父の騒動と同じやうに、時の政府に對する、反抗の意味から起つたことは言ふ迄もない。静岡縣人が中堅となつて、起した事件であるから、世間では、之を静岡の國事犯事件と稱して、相當に評判されたものだ。

箱根から西の方へ、東海道に沿つて、大小様々の都會がある。何れの地に行つても、多少の自由黨員はあつて、相當の勢力は、占めて居つた。其中で、静岡にあつたのが、岳南自由黨、濱松にあつたのが、遠陽自由黨、岡崎にあつたのは、岡崎自由黨、其他にも澤山あつたけれど、兎に角、此三方面の自由黨が、最も能く活動したのである。岡崎には、國島博といふ男が居て、それが首領株で、相當の勢力を張つて居た。濱松には、山田八十太郎、中野次郎三郎、澤田寧等が居て、岡崎のよりは一層の勢力があつた、それから静岡には、鈴木音高、前島豊太郎、湊省太郎、廣瀬重雄、是

等の連中が、羽翼を張つて、岳南自由黨の名は、中央へも強い響きを有つて居た。鈴木父は、山岡景高と云ふて、昔は、旗本の一人て、維新の變動に、徳川慶喜が、静岡へ引上げた時、一緒に附いて来て、それから後は、全くの静岡人となつてしまつた。音高は、若い時から、非常に鋭敏な、頭腦を有つて居て殊に、辯説に長じて居た。先づ佛蘭西學を學び、それから法律を修めて、代言人の免許を得たが、三十二歳の時で、静岡で開業したのは、漸く二十四五に過ぎなかつた。代言人組合の會長として、非常に評判がよく、刑事事件に就ては、鈴木の辯護を受けなければ、有罪無罪に拘らず、被告人が、満足出来なかつた、さういふ位に、信用の厚い人であつた。湊は、是も矢張り、旗本の生れた。父は、新八郎と稱して、神田に、講武所が出来た時、劍術の師範役を、勤めて居たが、其俸に生れて、劍術の方は、一向駄目だが、非常に演説が、上手な人であつたから、一般の氣受は、頗る良かった。大した學問はなかつたが、文章を書いては、一種の天才肌であつた。其書いたものは、東海曉鐘新報に掲載されて、相當に信者を有つて居た位であるが、前島は、それ等の人の中では、最も古い一人、殊に代言人として、長く其職に就いて居て、財産も、相當に有つて居たので、先づ是が、岳南自由黨の首領株として、四方から見られて居たが、實際の勢力は、鈴木の方が、強かつたやうに、思はれる。鈴木は、此事件で、北海道へ送られてから十年の苦役を終つて、歸つて来てから、世間の事情にも疎くなり、思ふやうに、考へたことも運ばないので、遂に日本に見切りを付けて、亞米利加のシヤトルに行つて、相當の地位を作り、前年、十數萬の金を携へて、歸つて来る。性質の悪い友人に、煽て上げられて、皆使はされて仕舞ひ、元の本阿彌となつたので、それから再び、シヤトルへ歸つて、盛んに活動を始めたが、非常に肯かぬ氣の男で、よく働いて、やうやく盛返しをつけて、シヤトルに於ける、日本人中の元老となり、山岡先生と呼ばれて、大に勢力を、張つて居た。

出獄してから後は、山岡の本姓に戻つて、アメリカへ行つてからは、山岡音高で、有名になつたのであるが、太平洋沿岸の日本人に、何事か起ると、必ず山岡が掛けて、その解決をつけた。殊に、排日問題の始まつてからは、山

岡の獨占舞臺であつた。彼が得意の辯舌と、法律的頭腦とは、アメリカ人の排日に對して、遺憾なく働いた。遠く希哇に迄、遊説に出かけて、在留の日本人は、その對抗演説を聞いて、みな血を湧かしたものである。著者は、大正十一年に、アメリカへ行つて、久振りに、山岡に逢つた。が、彼れは昔の通りであつた。良妻を得て、子供も、男女二人在り、生活の苦惱もなく、相變らず日本人の爲に、世話を仕て居たが、著者に對しても、よく盡してくれた。

「オイ、井上ッ。近く歸朝するから、頼むよ」

と、いはれて、著者は、アメリカから歸つて後も、その一言を樂みにして、待ちこがれて居たが、その後ち、持病の心臓が悪くなつて、終に約束を果さず、シヤトルの土になつてしまつたのは、如何にも残念な次第である。

兎に角、此三人が、岳南自由黨の牛耳を執つて居たから、黨勢は、頗る振つた。而も、鈴木や湊の思想は、非常に強烈なものであつて、さちらかと謂へば、革命主義に近く、政府の是等の人に對する注意は、格別に嚴重であつた。政府の注意が、嚴重になる程、是等の連中の思想は、急激に走つて行くのは、所謂押へんさすれば、跳ね上るの道理で、それは已むを得ない。

茲に一言、附け加へて置くべきことは、其當時、自由黨員の多くが、有つて居た思想は、前にも屢々繰返した通り、佛蘭西傳來の革命主義であるが、それを、佛蘭西から輸入したのは、何人であるかといふに、今の西園寺公望、死んだ中江兆民の二人であつた。ゾオルテールの政治哲學や、ミラボー若くはダントンの、政治革命の論などを紹介して盛んに小壯者を煽動して、強い思想を有たせるやうにしたので、自由黨員の多くは、皆此思想に、感化れて仕舞つたのだ。

兆民が、最初に翻譯して、少壯者に與へた書物は、ジャンジャック・ルーソーの民約論であつた。改めて言ふ迄も

なく、ルソーの民約論なるものは、日本の國體と、合致する道理はなく、若し此民約論に唱ふる、政治主義なるものが善いとなれば、日本の國體の根本に、罅が入らなければならぬのである。それは、今の社會主義や共產主義が、日本の國體と、相容れざるの同一であつて、其程度に於て、大した相違はなかつた。

然るに、當時の革命主義や、民約論の主張する所は、日本の國體と、全くかけ離れて居たけれどもそれ等の思想を、有つて居た者が、國體の變更には、更に考へを及ぼして居なかつた、さういふ所に、甚だ面白味がある。それであるから、若し唱へて居る議論を、實行する場合には、併ながら、革命主義や、民約論の主張は、正當である、さういふの儘、又將來も變更する考はないけれど、併ながら、革命主義や、民約論の主張は、正當である、さういふの儘から、此位の矛盾はない。其矛盾を矛盾とせずして、其儘に理論と實際の、二つに分けて、之を使ひこなして行つた所に、甚だしい矛盾はあつても、其處が、日本人以外に、視ることの出來ぬ、一種の變態思想とも言ふべき、日本獨特の思想なるものが、潜んで居た、さういふことにはなるのだ。

岳南自由黨員の思想は、それから傳へられてあるから、兵を起して、政府を倒せば、國體に迄觸れて行くのが、本筋であるにも拘不、そんなことは、夢にも考へて居らず、腕力に依つて、倒す何きものは、政府のみであつて、既に政府が倒れば、それで、其考への總ては行はれたのであるから、それから先きに、其思想の實行を期さない、さういふことを、別に言ひ合せはしないが、誰でも、さう考へて居たのだから、甚だ妙ではないか。

初めは大袈裟に、靜岡を根據として、正々堂々旗上げて、政府を倒さうと考へたのであるが、其計畫が破れたので、後には、大臣暗殺に變つて來た。

明治十七年の秋、東京の自由黨本部に、全國の代表者が集つた時「現在の政府に對しては、さういふ態度を以て、進んで行つたら、宜しいか」と云ふことが問題になつた。鈴木や湊は、非常に強い、議論を唱へて、一身を犠牲にしても構はぬから、兎に角、兵を擧げて仕舞へと、云つたやうな説を唱へて、それが端なくも、板垣總理と、衝突の原

因になり、遂に鈴木等は、豫ねて願布されて在つた、板垣の肖像を突き戻し、多くの、同志には、絶交の宣言迄して、靜岡へ引上げて來た。

是は、年の壯い者が、一時に思ひ詰めて、強い態度に出たのであるから、日を経るに従つて、多少は緩和されたであらうが、一旦さう言ひ出した以上は、今更後へ引けぬ、さういふ、所謂行掛りの事情が、絡まつて來て、何事か爲して視せねば、反對論者に對しても、顔が會はされぬと、堅く主張するものがあつて、終に其覺悟を以て、進む事になつた。

従つて、其行動は甚だ派手なもので、同志を募るにしても、各縣へ亘つて、成るべく多くの人を集め、又事を起すにしても、正々堂々とやらう、さういふのだから、之に要する費用も、少なからず要かつた。多年の政治運動に、私財を失ふて居るものが、さうした費用に、堪へ得る道理はなく、遂には同志の間に、相談が成立つて、斬取り強盜武士の習ひ、さうせやるならば、行き着く所迄、遣つて仕舞へ、さういふことになつて、謂はば捨鉢の運動が起つたのである。是が此事件に就て、最も忌まはしき、強盜の罪名なるものが、起つた原因である。

鈴木と湊が中堅になつて、岳南自由黨の過激派が、秘密結社の如きものを造り、それ等の人が打寄つて、追々に相談が、進んで行く間に、其決心に就て、疑はしい者がある、片端から排斥して、眞に命を捨てる者、さういふ、存外に、確かりした同志が集つて政府に反抗し得る者を、集めるやうに努めた。人数は、割合に少なかつたけれど、

其中に、鈴木辰三と云ふ男があつた。演説をしたり、又文章を書いたりするやうなことは、甚だ不得手で、また自由黨員としても、餘り熱心な方ではなかつたが、或事情から音高と、非常に深い交り結び、湊にも、音高と同じ様な、關係を有つて居たので、先づ此辰三を、仲間へ引込むことになつた。後には、東京市の地所や家屋を、收容法に依つて、取拂ふ時分に、其價格を公定しなければならぬ、と云ふやうな場合がある、此辰三が、市の囑託を受けて、

評價することを引受けて居たが、昨今では、大分資産を溜めて、年も漸く老境に近くなつて来て、隠かな生活はして居るが、昔の辰三は、さう云つたやうな人でなく、十四五歳の頃、清水の次郎長の子分て、大政と云ふ人に、養子に貰はれたこともあり、非常に激しい、氣性を有つた人で、今現に、左の手の指が、一本足りないが、それは、十七八歳の頃、實家へ戻つて来た時、兄は、非常に堅い人で、さうしても、辰三の家に、入ることを許さなかつた。そこで、辰三は、指を切つて、兄の前へ、改心の證として、差出した時には、兄は勿論、一家の者が、非常に驚いて、漸く其歸參を許した、さういふやうな逸話もあつて、むづかしい書物は讀めないにしても、四書や五經は、さうか斯うか、素讀が出来、さういふ程度には文字も知り、敢て腕力家といふのでもないが、相當に腕節も強く、且つ大膽な男であつたから、音高や湊から、大事な相談をされた時も、左迄驚いた風もなく、今日迄同じ黨員として、進んで来た以上は、此秘密を打明けられて、今更逃げることもならぬから、一緒に行かう、さういふて、簡単な答で、其仲間入りをした位であつた。

岡崎の自由黨には、國島の外に、後藤文一郎、福岡精一の二人が居た。其他にも、相當な人物はあつたが、さう云へば、漸進主義の人で、餘り激しい運動には同意をしなかつた。遠陽自由黨の方には、山田中野が居て、強烈な革命思想を有つて居たから、さうしても、岳南自由黨の方へ、近付いて行くのが、當然であつて、鈴木の一派と此連中が、遠く聯絡を執つて、愈々事を起すことになつた。

其時代の有志家は、是れさういふて、別に金儲けがないのであるから、父祖傳來の財産や、田畑を賣り食ひにして、政治運動を、續けて居たので、其頃は、誰も彼も、財産は、殆ど空虚になつて居たのだ。此中に於て、代言人といふ職業のある爲に、相變らず稼いで居たのが、鈴木一人であつた。代言人としては、相當に流行つたが、それにしても、昨今の辯護士と違つて、其頃の代言人は、報酬や手数料に就いても、今のやうなあくさく取方をしないから、外見を張つて、派手に交際をして居るだけ、收支は相償はず、頗る苦しい立場には在つたが、他のものに比ぶれば、収入の、

有る所から、同志の爲に、運動費の供給はして居たのである。日が進むに連れて、其計畫は、熟して来た。併ながら、何事をなすにも金が無ければ、全く駄目なのであるから、其金策には、非常に苦んだ。追々同志が、殖えて来るに従ひ、其費用も嵩んで来る、さういふやうな譯で、音高が一人で、稼ぐ位の事は知れたものであるから、同志一同の運動費を、引受ける迄にはならなかつた。況して、愈々事を起す場合には、少なからぬ金を要するので、其點に就ての苦心も、實は一通りてなかつた。計畫は、色々に立てるけれども、愈々さういふ時になれば、金が無いので、折角の考も、無駄になつて仕舞ふ事が多く、それではならぬと、更に他の方法を考へても、矢張り、金の爲に、中止することになつて、何時迄経つても、同じことを繰返すのみで、計畫は少しも運んで行かぬ。そこで、段々集つて、斯う金がなくては仕様がなから、善いことではないが、富裕な家に押込んで、強奪する外はない。さうせ、自分等は、名の爲にするのでなく、國民が、悪政に苦んで居るのを、救う目的で動くのだから、縦し其行爲は、國法に問はれて、悪名を取つても構はぬから「遣つて仕舞はう」といふ迄に、せり詰めてしまつた。

先づ、資金を得る爲に、強盜を働く、さういふことを決めたのであるが、其他にも、之をなすの必要は、もう一つあつたのだ。同志の一人に、加はつた者には、必ず一度は、強盜を働かせる事にすれば、さうしても盟約に叛いて、其仲間を、脱退することが出来ず、其決心も、愈々固くなるから、さういふ理窟もあつて、そこで段々、資金募集の計畫は、進んで来た。

静岡に、大きい國立銀行があつて、湊の知人が、其銀行に務めて居た關係から、銀行の内部は、能く判つて居た。一年に數回、國庫の代理に、政府から取扱ひを、引受けて居た行金を、大藏省へ送ることがある。其取扱ひを、友人がやつて居たのであるから、湊は、其事情を、能く知つて居て、此公金を掠奪しよう、さういふ計畫を立てた。

濱松の中野次郎三郎が、木原成烈と云ふ同志を連れて、箱根山に立て籠り、銀行員が、金を持つて上京するのを、

待受けて強奪することになった。所が、さういふ都合であつたか、銀行の方では、清水港から、汽船の便を借りて、送金して仕舞つた。一週間以上も、箱根山に立籠つて居たが、折角の計畫も、全く駄目になつて、静岡へ引上げて来た。若し、此公金の三萬圓が、手に這入れば、其時に、正々堂々、旗上げをして仕舞つたに違ひない。けれどもそれが挫折したから、已むを得ず、今度は、小取り廻しに集めやう、さういふことになつて、それから各所へ、強盜に押込むことになつた。

それ等のことを、詳しく述べれば、單に其事だけでも、一冊の書物をなす位に、色々な事情もあるが、それ等は省略することにして、其事件の中で、最も大掛りであつたのは、濱松在の金刺銀行へ、押込んだ時の事を述べやう。此際に、音高、辰三、省太郎、其他の静岡連が、濱松へ乗込んで来て、傳馬町の山田の宅に潜伏し、中野が、一切の計畫を立て、明治十七年の十一月に、十数名の有志が、それへ變装して、金刺銀行へ押込んだ、頭取を縛り、脅迫して居る最中に、火の番が、之を見附て騒ぎ出したので、それが爲に、附近の人達が二三百人、柄物を携へて、銀行を取巻き、大騒ぎを初めた。そこで、一同は、折角の目的を達せず、此場を切抜けることになつたが、辰三は、真先きに飛出して、右の手に、抜刀を振り乍ら、群衆の中に切込み左の手に携へた、短銃を、空に向つて放ちつゝ、一方の血路を開いた。此際の働きは、實に驚くべき大膽、且つ敏捷なものがあつて、一同は、辰三の爲に、此重圍を免れた、さういふ位である。

一旦は、短銃の音や、刀の光に驚いて、群衆は、引き去つたが、多數を恃んで、追ひ驅けて来る。真先きに進んで来たのは、金刺警察署の巡查何某と云ふ者であつたが、是は眞蔭流の達人で、銀行の夜警を、引受けて居たのだ。柄木縣人の宮本鏡太郎、さういふ男があつた。宇都宮の出生で、年は漸く二十一二であつたが、非常に元氣な且つ嫌味の無い、男らしい氣分を有つて居た。官吏侮辱罪で、重禁錮の缺席裁判を受けて、東京に隠れて居る間に、星亨に見出されて、星の家に、潜伏して居たのを、音高が、星を訪ねた時、宮本を紹介して、其内情を打明けた上に、宮本

の保護を、鈴木に托した。音高は、それを引受けて、静岡へ連れて来て、自分の家に、匿まつて置いた。

此宮本が、一番遅れて走つて来た。その跡から、追ひ纏つたのは、例の巡查で「賊待てッ」と言ひながら、近寄つて来た。それを平氣で、宮本は、足を留めて、振かへりざま抜打ちに、一太刀浴せた、劍術などは、少しも知らなかつた男だが、度胸骨の太かつたのが、勝利を得た譯で、眞蔭流の達人も、たつた、一太刀に、切倒されて仕舞つた。其間に、同志の一同は、濱松へ、別れへ引上げて来て、ほつ息を吐いた。是が、金刺銀行の事件として、當時、盛んに喧傳されたが、内容を言へば、甚だ話らないもので、十数名の者が、命掛けて掛つて、遂に十圓か二十圓の小使錢を、引擡つて引上げた、さういふ丈の事である。併ながら、此事件の中、是が一番に、重い罪狀になつて、裁判所では、やかましい問題になつた。

其他、村上佐一郎が案内者となつて、或村役場を侵して、金庫を擔ぎ出し、之を開くことが出来なくて、大きな石を、持つて来て、扉を叩いて居る間に、夜が明けて仕舞つたから、金庫を捨て、逃げた、さういふやうな、喜劇にてもありさうな、馬鹿らしい事柄もあつた。兎に角、本職の泥棒でないのだから、さうせ間抜けなもので、此連中が、強盜に押入つた先きは、五十何軒の多き上つて居るが、得た金は、僅かに二百餘圓である、さういふ嘘のやうな事件であつた。

長い間の事件も、金刺銀行が終結であつて、ざれ程、危い思ひをして、働いた所で、さうしても金にならぬ、さういふので、此連中も、遂に強盜の方は、諦めて仕舞つた。

著者も、此事件で押へられて、長い間、入獄の憂目を見たが、強盜の方には、少しも關係がなかつた。總て是等の人から、失敗の物語りを聞かされて、能く其内情は知つて居るが、見込んだ家に、押入つた時、存外に貧乏であつた爲に、可哀想だと思つて、銘々が有つて居る、金を置いて来た、さういふこともある。又相當の富豪が、俄に事業の大失敗で、貧乏して仕舞つたのを、知らずに押込んで、鈴木が、訴訟の鑑定をして、歸つて来た、さういふやうなことも

ある。是等の事情は、昔の都新聞に、國事探偵と題して、讀物として書かれた位で、強盜事件としては、甚だ間抜けなものであつた。

こんなことで、月日を送つて居る中に、そろ／＼事件の尻が割れかゝつて来た、警察署の方では、縣内の各地に互つて、頻々起る強盜事件、其遣り口が、全く素人であるのみならず、何處もなく普通の強盜とは、違ふ形跡があるといふので、其搜索は、一層嚴重であつたが、鈴木等の舉動が、可怪しいといふことになつて、其探偵は、追々に追つて来た。

是に於て、鈴木等は、到底事件の露顯は、免れることが出来ない、といふ覺悟をして、こんな事件で引ツかゝつて常事犯の醜名を以て、重い刑を、科せられる位ならば、初から命を捨る積りて掛つたのであるから、寧ろこのこと、思ひ切つて、大臣暗殺を遂行して、刑場の露を消えた方が、男らしくて可からう、といふことになつて、明治十九年の春頃から、同志が續々、東京へ上つて来た。

吉原の幫間に、松廼家露八といふものが居た事は、未だ人の記憶に残つて居るだらう。是は、道樂の結果、斯う云ふ商賣になつたが、昔は、徳川の旗本で、十肥庄次郎と謂つて、柔術が、非常に上手で、著者の如きも、一手二手は、此人から教へられたことがある。體重は、二十六七貫あつて、六尺に近かつた。旗本の道樂者は、多藝多能であつた、といふことは、誰でも知つて居るが、土肥も、矢張り其類で、ちよいと小唄も歌はれるし、手先で、踊りの眞似事なごをさせたら、實に輕妙なものであつた。殊に、苦勞の果てであるから人情の機微に亘つて、如才のない所があつた。音高の父が、同じ旗本である、といふ關係から、それを頼つて、静岡へ来たのであるが、仲の音高も惡意になつて、殆ど音高の腰巾着の如くなつて、幫間をやつて居たのだ。其頃は、松廼家と言はず、荻江と稱して、静岡唯一の幫間であつたが、音高が、東京へ出て来て、何れにか家を求め、そこを同志の密會所にしよう、と考へて居た矢先きに、露八も、静岡から出て来た。

根岸に、假名垣魯文の俸、熊太郎の棲んで居た、家が空いて、借りる事が出来る、といふことを、露八が、聞き出して来た。直ぐに音高が、見に行く、門構へて、庭も相當に廣いし、家も二階建て、殊に御行の松から、二二三丁の所、極めて幽靜な場所であるから、此處なら同志の密會所に、極めて適當であらう、と考へて、露八の名前で、其家を借りて其處を、同志の密會所に充てることにした。

斯ういふ事情で、追々に、地方の同志も、上京して来る。それは、嘗に静岡縣ばかりでなく、或は石川縣の高橋六十郎、或は岐阜縣の小池勇、或は愛知縣の荒川太郎、岐阜縣の島村友吉と言つたやうに、段々、集つて来る連中が、それ／＼別に、家を有つ者もあれば、下宿をする者もあり、毎日のやうに、根岸の密會所へ集つて、事を擧げる機會を、密かに覘つて居た。

著者は、多く湊ご、同棲して居た。湊は、淡痘痕のある、色の黒い、男振りから言へば、極めて醜男の方であつたが、何處もなく優しみのある、女に掛けては、一種の腕を有つて居て、湊に關係した女は、大概裸になつて、命を捨てる迄、跡を追ひ掛ける、といふやうな、色男であつた。後に、北海道へ送られてから、肺病で死んだが、其時分から助眼が悪くて、苦んで居た。

木挽町の常磐湯の路地に、朽木縣の大關熊吉といふ人が居た。是は同志でなかつたけれども、俗に謂ふ、世話好きの人で、浪人を相手に、世話をして居る、何となく面白味のあるものであるから、一同とも交際するやうになつて、同じ縣の關係で、宮本は、大關の家に、居ることが多かつた。大關が、此連中と惡意になつたのは、岡田普佐と謂ふ、朽木縣の富豪の俸があつて、澤山な學資金を使つて、明治法律學校に、通つて居た。流石に、富豪の俸だけあつて、何處もなく鷹揚で、落著いて居て、女のやうに優しい男であつたが、膽玉は、相當に太く、宮本と深い交りがあつた。此岡田の紹介で、大關が、一列の人とは、惡意になつたのである。其外に、神田猿樂町に大橋兵三郎、と謂うて、是れも、朽木縣の人で、下宿屋をして居た。其處へ岡田が下宿した

關係から、それとも懇意になつた、宮本や湊は、大橋の家へ、腰を据ゑることになつて、著者も、それと同じく、大橋の家に下宿することになつた。根岸の家も密會所であつたが、斯うなるを、大橋の家へ、出入の便利が、良い爲めに、同志の者は、多く集つて、密會を凝らすやうになつた。

今でも、著者の記憶に、はつきり残つて居るのは、五月下旬に、淺草の井生村樓で、此連中が、演説會を開いた。其時に、音高が一番遅れて來た。既に演説會を終らうと、する所へ、ぼんやり這入つて來たので、最後の演壇を引受けることになつたが、井生村樓は、後の明治病院が、それであつた。演説會場の傍ら、大きな料理店を、やつて居たので、一同が晚餐を、共にして居ると、音高が聲を密めて、

「我々の計畫が、其筋の方へ、知れたやうに思はれてならぬから、我輩は、國へ歸つて、それとなく妻を、離別して來たのだが、我々は急いで、事を擧げぬと、例の常事犯の醜名で、斃れることになるかも知れぬから、諸君も、其覺悟で、計畫を進めて呉れ」

と言ふた。

流石に、一同も驚いたが、何れにしても初めから、死ぬ覺悟はして居るのであるから、愈々臍を極めて、近く事を起さう、といふことに決つた。併ながら、相手もないのに、爆彈を擲げたり、刀を振つて歩けば、狂人にひこしい。何か事を爲すべき、目標が無ければならぬ。それに就て一同が、注意して居ると、丁度、六月二十六日に、華族會館で大臣參議が、夜會を催す、といふことを、宮本が聞き出して來たので、其晩に、一同が押寄せて、表門から爆彈を投込み、裏門へ、逃げて來る奴を、片端から斬つて仕舞はう、といふ計畫を立て、大體に於て、其の手筈を定めて、同志を集めることになつた。

是に於て、地方に居残つて居る、同志へは、其旨報告する爲に、湊が出發することになつた。其送別の爲に、木挽町の萬安で、四五人の同志が集つて、小宴を催し、湊の行を壯にした。湊は其晩の中に、東京を離れる計畫であつたから、夜の九時過ぎになつて萬安を出た。出雲橋の所迄來ると、最前からいろ／＼變裝して、待受て居た警視廳の巡查が、俄に駆け寄つて、湊を警視廳へ連れて行つた。

奴が、尾いて來たことは、誰一人として、知る者はなかつた。

著者は、其時分に、神田表神保町の潤廣堂といふ、體操器械屋の注文掛りをして居た。是は、三浦龜吉が、開いた店で、三浦は初め根津の遊廓で、車夫をして居て、綽名をチイ龜と呼べ、大井憲太郎や、大江卓の抱車夫を、爲て居た關係から、何時か聞き覺えた、自由民權論を、振廻はすやうになつて、遂には車夫を廢めて、其親戚に、資産家のあるのを幸ひ、資金を引出して、體操器械屋を始めた。

今では、西洋流の運動が、非常に盛んになつたので、別に珍しくもないが、其頃は、東京に於て日本人が、小さいながら體操の器械を、自から製造して、各學校の注文を引受けたのは此家が元祖であつた。著者は、元來が、商家の出身であるから、三浦に頼まれて、當分の間、支配人格で、各學校の注文を、受取る役になつて居たのだ。萬安の宴會から、歸つて來て、翌朝は、華族學校の注文を、受ける爲に、出掛けて行つて、其用件は早くすませて、木挽町の大關へ訪ねて行くに、町の四ツ角に、正服の巡查が、二三人立つて居て、何さなく様子が可怪しかつた。自分の一身に關する事は知らず大關の家に這入つたが、意外にも、戸主の大關は居ないで、警視廳の探偵が、坐つて居た「失錯つた」と思つたから、著者は逃げやうとするに、外から正服の巡查と、私服の巡查が、二三人やつて來て、到頭押

へられて仕舞つた。始め逃げやうとしたので、酷く毆られて、本繩に掛けられて、警視廳へ送られた。

其前晩に、音高は、淺草の代地の名倉といふ符合に、泊つて居たが、其主人は、林藤太郎と謂うて、舊幕時代の岡ツ引で綽名を赤鬼と言はれた、屈指の探偵であつた、さは知らず、平生から遊びにゆくので、其晩も、名倉へ遊びに來て、泊つて居たのだ。斯うした事情で、音高は、既に拘引されて居たのを、同志の者は、誰も知らずに居たから、

三四日の間に、平生親しく交際する有志家は、總て拘引された。それと同時に、静岡岐阜各地に互つて、盛んな檢舉が起つて、少し怪しいと思ふ者は、悉く縛られて、段々訊問の結果、愈々此一類を認められた者丈は、警視廳へ送り附けられた。

此事件の訊問は、警視廳で受けて、裁判も、東京で受けることになつたのだが、事件の本源は、静岡だといふので世間では、之を静岡事件と稱した。警視廳へ率れた者は、二三十人あつたが、段々調べられた末、二十幾名が取残されることになつた。

著者は、強盜事件には關係がなかつたが、萬更知らぬ云ふのでなく、薄々は知つて居たのだ。華族會館へ斬込んで、大臣參議を暗殺する、さういふ方の事件に、關係が見られて、遂に未決監へ入れられることになつた。其時の罪名は、強盜殺人と云ふのであつたが、未決監は、殆ど一年に互り、四疊半の獨房に抛り込まれて、随分酷い目に遭つた。

公判の結果は、荒川と島村、それから前島豊太郎の伴格太郎と、著者の四人が、免訴されて、後の二十幾名は悉く有罪になつた。最も重いのが有期徒刑十五年、輕いのが三年であつた。前の赤井の時に話した、清水綱義と、其伴の高忠も捕はれて、是は十二年づゝの刑を受けた。

北海道に送られてから死んだのが、湊と綱義の二人であつたが、其他の者は、議會が開けてから、特赦出獄を許されたけれど、出獄の後、一人として成功した者はなく、總て末路は淋しいものであつた。著者は、此の事件の時は、井上姓であつたが、出獄した時は、既う伊藤姓になつて居た。何しろ強盜殺人といふのだから、父は驚いて、著者を廢嫡して、同時に伊藤姓としまつたのである。

名古屋事件

前年の大虐事件で、死刑になつた奥宮健之、此人は高知縣の出身で、父は僧齋と謂つて、有名な陽明學者であつた。長男が正治、次が健吉、健之は、其三男であつた。正治は、日露戰爭の焼打事件の時、東京地方裁判所の檢事正をして居て、後ち宮城地方裁判所の檢事正に左遷されたが、其在任中に、弟の健之が、あつた罪に依つて、死刑になつた爲に、責任を引いて、辭職してしまつた。

次に健吉は、明治十七年頃に、通俗政治講談を始め、森林黒猿と稱したのが、此人であつた。それを止めてから公證人になつて、此世を去つたが、一時は、世に知られた人である。其後、普通の講釋師の中に、森林黒猿といふ者が出来たが、それは子弟の關係があるでもなく、また健吉の許しを得たのでもなく、自分の勝手に名附けたので、是も死んで了つたが、古い講談好きの連中は、此名前は、まだ記憶して居る筈だ。

健之は、父の仕込みで、漢籍の素養が深く、殊に、佛蘭西學が出来るので、自由黨の若者の中では、非常に重寶がられた人であつた。辯舌が善く、文章も、達者に書いて、地方遊説の時は、何時も特派員に推された。東京へ、初めて出た時分に、慶應義塾へ這入つて、今の犬養木堂等と、共に机を並べたこともあり、學校を出てから、三菱會社の社員になつて、加藤高明等と、會社の事務に、當つたこともあつた人で、割合に舊い人物であつた。

大虐事件に引掛つて、死刑にはなつたが、あの連中と、深い關係もなく、その計畫には、參加して居なかつたやうに著者は、堅く信じて居たが、死刑になつた所を見ると、或は關係があつたのかも知れない。

唯斯う云ふ事が、一つある。健之は、名古屋事件で、無期徒刑になつて、北海道へ送られたが、其後出て來ると、政界の事情も、昔と違つて、



政黨の内部にも、色々の變調があつて、昔風の黨員は、餘り喜ばれなかつたので、健之は、重く用ゐられなかつた。それに、不平のある爲めに、明治三十三年の頃と記憶するが、當時の自由黨の中に、薩派と長派の二派が分れて、時の松隈内閣を、援けるか否や、といふことが面倒な問題になつた。

是は、樺山と高島の手が、黨内へ延びて来て、松田正久、杉田定一、田中賢道などいふ連中と相應じて、代議士總會の席上で、薩派と提携する、といふことを決めに掛つた。其際、林有造や片岡健吉が、板垣を擁して、長州派と、握手の約束があつた爲めに、此提携運動を、阻みに掛つた。其結果、終に壯士が、血の雨を流すやうな、騒ぎを惹き起して、多くの重傷者を出した。其際に、健之は、薩派の方へ、力を入れて、本部の襲撃に加擔したので、土佐派の連中が、甚く憎んで、健之を、寄せ附けないやうにして仕舞つた。健之の方でも、亦面白くないから、本部へは、餘り足繁く行かぬやうになつた。自然と、政黨の關係が薄くなり、筆と舌が、能く廻る爲めに、其頃から、はやり出した社會主義や、無政府主義の翻譯などをして、雑誌や新聞へ投書しては原稿料を得て、生活を支へて居た。著者は、幸徳や堺枯川等とも、懇意にして居たので、奥宮に向つて、

「君は、原書も讀めるし、文章や演説も巧みであるが、今の政黨員の間には、迎も向かないから、寧ろそのこと、社會主義者の仲間入りをしたら、どうだ。幸徳は、君と同縣人の關係があるし、堺は、僕も良く知つて居るから、君が行くと云ふのなら、僕から話をして、相當の位置に着かせることにするが、どうだらうか」

と言つたら、奥宮は、二三日考へさせて呉れ、と言つて、歸へつて行つたが、聽てやつて来て、「どうも、我輩には、社會主義者の仲間に入る、決心が附かぬから、此儘に、現状を保つて行き度い」と云ふから此相談は駄目になつた。

併ながら、社會主義者との交際は、相不變やつて居たやうであるが、斯うした事情から、考へて見て、奥宮が、幸徳等の事件に關係して、死刑になつたといふことは、裁判の結果に就て、一點の疑を入れる餘地はないが、何とな

く奥宮に物が挟まつたやうな、感じもするのである。

明治十七年の前後に、名古屋の自由黨は、非常なる勢で、發展して行つた。祖父江道雄、大島宇吉、久野孝太郎、大島清、塚原九輪吉、鈴木滋、岡田利勝、木俣甚助、内藤魯一、近藤壽太郎、澁谷良平等の連中が、郡市に跨がつて盛に活動して居たので、改進黨は、殆ど足を踏み込む餘地もない位に、自由黨の勢力が、蔓つて居た。

此處にも、溫和派と過激派の二組があつて、何れも黨内で、軋轢をして居た。内藤、大島等は、漸進主義を執つて穩に進んで行かう、といふことを、常に唱へて居たが、祖父江の一派は、常に過激な説を唱へて、非常手段に非らざれば、政治の改革は出來ない。と固く持して動かなくなつた。それが爲めに動ともすれば、兩派の軋轢はあつたが、併し、黨の勢力を、擴張する上には、共に力を添へて居たので、愛知自由黨の勢力は、非常に盛なものであつた。

過激派の主張する所が、何時か知らず、實際運動に觸れて行くことは、自然の傾向で、止むを得ない。然るに、自由黨の特派員として、星亨が、乗込んで来て、是等の連中に會ふた時、星は、頻りに激しい議論を唱へて、暗に煽動をした。傾があり、是が爲めに過激派の思想は、一段と激しくなつて来た。

惑事事を起すとしても、軍資金が缺乏しては、迎も働けるものでない、といふ説があつた時に、星は、紙幣製造の容易なることを、暗示したので、それから塚原と久野の二人が、密かに印刷機械を購入れて、百萬圓餘りの紙幣を、製造することに著手した、といふこともあつて、名古屋事件の煽動者は、星であるといふては、ちと穩でない言方であるが、其關係は、斯の如きものがあつた。

紙幣製造の計畫も、意の如く進まず、實際に始めて見れば、考へて居た通りに出來るものでないから、何時か、此計畫は抛つて、静岡事件の人々のやうに、早手廻はしに、掠奪を始め出した。是も十數ヶ所の富豪を脅したけれど、其取つた金は、考へて居た、百分の一にも充たず、多くは、日々の運動費に、使つて仕舞ふ、といふやうな状態であつた。

過激派が集つて、自由黨の外に、公道協會と云ふものを起した。多く此處に集まるやうにして居たのは、温和派の妨げを、受けることを、避ける爲めであつた。健之が、東京から地方遊説として、東海道を遍歴して、名古屋へ、這入つて来た時は、公道協會の活動が、最も盛な時であつた。家も廣く、有志者も、泊める丈の設備があつたから、暫く此處に、足を留めることになつた。殊に、英佛の語學も出来るし、漢籍の素養も深いのであるから、多くの子弟を集めて、それを教へながら、暫く滞在してゐたのであつた。

黨員の請求に應じて、各所の演説會にも出た。辯舌も良い方であつたから、非常に評判が高くなつて、奥宮健之の名は、名古屋人の間に、相當に知られるやうになつた。或夜のこと、同士の集つて来た、席上に於て、健之が、盛に無政府主義者や、虚無黨の話を始めて、政府改革には、極端な過激運動を用ひなければ、容易に目的を達することは出来ない、といふやうなことを頻に唱へて、一同を、煽動するが如き、語氣を泄らした。此時に、大島渚が、奥宮に向つて、

『先生の言はれる所は、單に机の上の議論であつて、實際になつたならば、果してどうであらうか』

と、多少の疑を以て、恰も詰るやうにいふた。健之は、

『吾輩の説は、實際に行ふことの出来ることを言ふのである。吾輩も、亦其實行を辭するものではない』

と、きつぱり答へたので、茲に始めて、渚等は、自分等の計畫の内容を話して、健之に、同意を求めた。

健之は、自分から好んで、其渦中に飛込み、掠奪的の仕事迄しようとしたのではなかつたけれど、勢に委せて、辯じ立てた、其隙に乗ぜられて、到頭一同に、抑へ付けられ、厭とも言へず、其仲間入りをする事になつたので、終に強盗事件にも關係するやうになつた。

琵琶島の附近に、非常な富豪があつて、是へ押込めば、必ず纏つた、大金の取れる、見込みがある、といふ報告が来た。其處で十七年の十二月、大島渚が先立ちになつて、健之も、其中に加はり、一列が、三組に分れて、其富豪へ

押込みに行つた。併し、此時も、目的を果さずに、空しく引上げようとして、平田橋を渡らうとした時、密行の巡査に、訊問を受けた。其押へられたのが、不幸にも、演説で顔を知られて居る、健之であつたから、事に依ると、是から今迄の事件が、總て露顯に及ぶかも知れぬ、と視て、首領の渚が、後へ引返へしながら『殺つちまへ』と聲を掛けた。

其處で、久野が、先づ、其巡査に、一太刀浴せた。久野は、擊劍の達人で、警察署なぞへも、指南に行くほどの腕前を持つて居たので、たつた一太刀ではあつたが、巡査は、即死を遂げた。

附近の駐在所から、巡査が駆け付けて、非常な騒ぎになつて、遠巻きに集つて来る。巡査等を威嚇しながら、引上げて来た。健之も、面白半分に、倒れた巡査に、一太刀浴せた。是が後に、罪狀の最も重きものになつた。

自由黨の陰謀に、強盗事件の伴はぬのは、飯田事件ぐらゐのもので、其他には、皆あつたといつてもよい。今から思へば、淺薄なことをやつたものではあるが、一面から言へば、其頃の有志家なる者には、是丈に強い覺悟があつたとも言ひ得るのだ。如何なる目的を、有つて居るにもせよ、人の家宅に侵入して、金錢を強奪するといふことを、善いとは無論言へないけれど、併し、其金を、何に使ふかと言へば、政府轉覆の陰謀に使ふ、といふのであるから、己れの享樂の爲めに、使ふ金と違つて、其間には、多少の區別を置いて視る可きであらう。其掠奪が、巧く行つて、事を起した所で、政府を倒し得るか、どうか、甚だ疑問としなければならぬ。其點から考へれば、固より無謀の擧げはある。けれど自分の身を殺して、一國の政治を改革したい、といふ心から、起つて來ての行爲であるから、之を以て、或は輕卒であるとか、或は暴擧であるとか、いふ點からばかり論じて、排斥し去るのは、批評の當を得たものではない。

さればとて、政治運動をする者に、斯ういふ點までは、進んで行つてもよいと、教へる譯ではないが、兎に角、多少の宥恕すべき事情がある、といふに過ぎないのである。

今の政黨員なる者は、多くの人の蔭に隠れ、卑劣な手段を以て、巧に金儲をする事ばかり、考へて居て、扱て其金を、何事に使ふか、といへば、別荘を建てたり、酒色に費す外、何の考もないのである。自分の身を殺して、政治の改革をしようなど、といふ考は、薬にしたくも持つて居るまい。今の政黨員なるものは、一個の金儲組合であつて眞の政治を意味した組合といふことは出来ない。昔の政黨員には、其行爲や言説にこそ、粗暴なことも輕學な點もあつたらうが、身を殺して仁を爲す、といふだけは、何處までも忘れずに居たのだから、單に淺薄な行動を執つたから、其人の心術迄が賤しい、といふて、排斥することは出来ない。

此事件が露顯して、一同が、縛に就く時、名古屋の騒ぎは、殆ど一揆が、押寄せて來るのではないか、と思はれるほどの状態で、非常な混亂に陥つた、といふやうに、聽いて居る。平田橋の巡查殺し、と稱する一事は、新聞雜報を賑はした位の大事事件であつた。其關係者も、數十名の多き上つて居たから、堀川の監獄は、非常に賑はつたものである。死刑になつた者は數名あつて、多くは十年以上の懲役になつて、北海道へ送られた。其中の塚原は、前の海軍大臣八代六郎と、血族の關係があつて、今は大阪に於て、晩年を氣易く送つて居る。久野は、濱松の歌舞伎株式會社の社長として、傍ら質屋と金貸しをやつて居るが、相當の資産も出來て、今では、一寸顔が利くやうになつて居る。其他の連中は、大概凋落して、何等聞く所もない。溫和派であつたけれど、一時は入獄はしたが、罪を免れ、今尙ほ政友會員として、頗る勢力を持つて居るのは、新愛知の社長大島宇吉である。澁谷は、非常に金を儲けて、其子供は、皆な良いのが出來て、昨今では樂隠居で、世を送つて居る。

健之は、此事件に依つて、巡查殺しの正犯であるから、どうしても死刑にならなければならなかつたのだが、兄の正治が、非常に心配して、それが爲めでもなからうが、死一等を減ぜられて、無期徒刑となつた。北海道の獄を、十餘年勤めて出て來たが、前に言つたやうな、事情で、終に死刑になつて了つたのは、自業自得とは言ひながら、其才智のあつた事と、文字の深いことに於ては、惜しむべき人であつた。

飯田事件

議會が開かれてから、日本製糖株式會社の疑獄が起つた。代議士の拘引された者も、十數名に亘つて、社長の酒匂常明が、短銃自殺をしたり、磯村晋介や秋山一裕等が入獄して、評判の事件であつたが、其代議士の中に、村松愛蔵と云ふ人があつた。三州田原の出身で、あの方面に於ける志士としては、頗る人望のあつた人である。早くニコライの信者になつて、西比利亞へ渡り、非常な苦勞をして、莫斯科迄行つたこともある位で、露語は、相當に修養が、積んで居た。其爲人は、堅實な方で、金錢に對する信用は、頗る厚い人であつた。

斯うした人物が、あのやうな疑獄に引掛つたのは、今から考へても、實に不思議だ、と思ふ位であるが、併し、實際に於て、全く關係があつたのだから、致方がない。

聞く所に依れば、其收賄した金は、五千圓だと云ふ。當時、村松は、政友會本部の幹事をして居て、例の横井時雄と、同列の人であつた。横井の收賄も五千圓であつたが、どちらも選挙費用に、窮して居た所へ、秋山が、其應援の意味に於て贈つたので、多少の疑ひはあつたが、之を受け收めて、選挙は、無事に終り、どちらも當選して來た。秋山が、金を送つた趣意は、「製糖會社を、政府へ賣受ける、運動の補助をして貰ひたい」といふ意味であつた。是は後になつて、起つた問題で、之を送る時分に、さうした約束は無かつた。金を出した方の考へが、それであつたから、結局は、義理に絡まれて、二人ともに、秋山の請託を容れた。これが、法律上の罪となつて、疑獄中の一人になつた譯である。

横井は、小楠先生の遺子である。どちらかと云へば、學者肌の人で、政治向きの人物ではなく、殊に、クリスチヤンの方では、有名な人で、其資性も、極めて温厚な、悪いことなぞの出来る人ではなかつた。事情が、今のやうな譯

であつたから、其金に手を觸れたのが、圖らずも、罪を引くことになつた。當時の被告人中、最も同情すべきは、此二人であつた、といふことは當に著者ばかりでなく、係りの検事も、頗る同情されて、現に、横井が、第一審に有罪になつた時、執行猶豫の恩典が、附加されなかつたのは不當である、といつて、検事が、控訴した位である。凡そ日本の裁判所が開けて、裁判官が、執行猶豫を與へなかつたのが、不當である、といつて検事から、控訴された者は、此人の外にはなからう。

村松も、矢張同じやうに、検事は、努めて刑を軽くして貰ひたい、といふ、請求をして居る。すべて、斯うした疑獄で、捕はれた者は、大概は、罪を隠して、人に塗り付けよう、とするやうな、卑怯者が多いのであるが、此二人は訊問を受けると、一も二もなく、恐れ入つて、

「斯様な不正の行爲をしたことは、洵に汗顔の至りであるから、國法に依つて、然るべく處罰して貰ひたい」  
と、明かに自分の關係したことを自白して、刑罰を甘んじた。その立派な態度に對しては、如何に鬼のやうな検事でも重い求刑は出来なかつた。殊に、村松の如きは、

「自分が本部の幹事をして居りながら、斯ういふ金に手を觸れたのを、他の代議士が見て、幹事ですら、斯の如くであるから、自分等も、取つてよからう、といふ考から、收賄したものであらう。自分は、如何なる極刑に處せられても、憾みはないから、他の代議士に對しては、努めて罪を軽くして貰ひたい」と、いふて居る。

事件が済んで、出獄すると、政黨の關係を離れて、救世軍に走つた。今では大佐か少佐になつて居るが、ブー／＼ドン／＼とやりながら、街頭に立つて、説教をして居る。時々其姿を見受けるから、心から過失と覺つて、一時は、政黨員中の名士と謳はれた人が、斯ういふ事迄やつて、敢て厭はない、といふ所に、村松の人格の一端は、仄めいて居る。横井も同じやうに、政界と縁を斷つて、善良なクリスチャンに戻つて、教壇に立つて居たが、最近に世を逝つ

た。それに較べると、昨今の代議士は、不正な行爲があつて、刑を受けても、平氣で選挙を争ひ、誤つて當選して、議會の演壇に立つて、何の愧ぢる所もなく、政治に容喙して居る連中もあるが、其人格に於ては、雲泥の差がある、と思ふ。

飯田の國事犯事件は、此村松が首領となつて、伊那郡の飯田に、兵を擧げて、天下に檄を飛ばし、同志を募つて、

政府の改革をしよう、としたのであつた。其參謀の一人に、櫻井平吉といふ人があつた。是は信州人で、無聲無煙の火藥を發明しかけて、遂に其事が成らず研究は蹉跌したが、一時は、それに依つて、世間に知られた人である。其外に、八木重治、川澄徳次といふやうな、連中も居て、名古屋鎮臺の兵士を煽動して、飯田と名古屋と相應じて、大きな事件を起さう、としたのが、本來の目的であつた。それが、平田橋事件から、端なくも露見して、遂に捕縛されたのである。それであるから、此事件は強盜の方に關係がなく、純然たる國事犯であつて、強盜事件が、露見した爲に押へられて、取調べが進行して行くに従つて、それに、關係なく、純粹の國事犯である、といふことになつて、更に國事犯として、公訴を起された不思議な事件である。

事を起さうとしたのが、飯田であつた爲に、事件は、長野裁判所へ移された。未決中は、松本の監獄に居たが、裁判は、長野重罪裁判所で受けることになつた。此時分に、自由黨の陰謀が、續々起つて來るので、政府の方針が、總て附帯した、常事犯で處罰する、といふことになつて居た。純粹の國事犯でも、法律の上から言へば、東京に、高等法院を開いて、訊問すべき筈であるが、さうすると名譽心に驅られる者が、其眞似をするといかぬ、と、變な所に、考を及ぼして、成るべく中央で、裁判を開かぬことになつて居たのだ。其結果、飯田事件は、長野裁判所へ廻されることになつた。數年前に死んだ、政友會本部の幹事翠川鐵三も、此事件で押へられた。有罪にはならなかつたが、永い間、未決の苦しみを嘗めた。

憲を公判になつてから、村松が、事件の経過を、陳述する間に、政府の税政を論じ、種々な證據を擧げて、政府の大官が、不都合なる事をして居ることを、段々證明して、日本の政治は、斯の如くであるから、當路の政治家に誤りに堪へぬ」と述べ來つた時に、村松は、涙に噎せんで、其陳述を盡すことが出来なかつた。立會の檢事も、貫ひ泣きをする。裁判長も同じく、ハンケチを以て、眼を蔽うた。裁判は、是が爲に、一時は中止になつたほどだ。村松の人格が、法廷に於ける、總ての人を動かした結果である。

併ながら、國法には、觸れて居るのであるから、判決の結果は、有罪となつた。村松は五年、其他の者は四年、或は二年、一年等の刑で、處分を終つた。代議士としても令名はあつたが、日練事件に引掛つて、今日では、政治界に、村松愛藏の名を、聞くことを得なくなつたのは、誠に惜しむべきの至りである。

平田橋事件と飯田事件とは、斯うした關係を、持つて居た。村松は、廉潔な人であつて、假令目的の爲に、手段を選ばずとするも、掠奪返はやらぬ、といふ考を持つて居た爲に、純白な國事犯として、處分されたのであるが、其因縁を求めて行くと、静岡事件にも、深い關係があつた。其事件に聯絡がありながら、獨り此事件支は、國事犯として處分されたのは、全く村松の人格が、之を致したものと、視る可きである。

秩父暴動

自由黨員に關係のある、國事犯の中で、秩父暴動だけは、一種特別のものであつた。其首腦になつた人は、田代榮助、加藤織平の二人で、是は純然たる自由黨員でなく、單に、自由黨に近い人であつた、といふに過ぎなかつた。殊に、田代は、昔の所謂俠客なるもので、政治運動などには、餘り深い關係は、有つて居なかつた。却つて加藤の方が、自由黨員に、近づいて居た爲に、田代が動かされた、といふ傾きがあつた。併、何れにしても時代に反抗して、起つた事件には違ひない。然るに、此事件の裏面には、一人の女が、活躍して居た、といふのが、他の事件に比べて、非常に特色のある點であつた。

埼玉縣の黨員に、村上泰治と云ふ人があつた。年は漸く二十三四で、極く若い方ではあつたが、秩父山中の一豪家であつた爲に、運動費にも、事を缺かず、四方に交友を求めて、相當に勢力もあつた。多少の文字もあり、膽玉も太く、年の若い割合には落着きもあつて、此方面には、殊に重きをなして居た人であつた。其妻が、名をはん子と云ふて、是が亦婦人には、珍しい活動家で、而も、非常な急進論者であつた。良人の泰治を促がして、劇しい政治運動をやらせたのは、此夫人の力が、其半ばにあつた、といふても差支へない。

昨今になつて、婦人が、参政權運動を始めたが、其他、様々な運動を起して、婦人の中にも、難かしい理窟を、言ふ人が、殖えて來たが、明治十六七年の頃には、さうした人は少なかつた。全國に跨つて、自由黨員の数は、三十萬と稱したのだが、婦人の黨員は、たつた一人のみで、横濱の澁澤與三郎の妾であつた、婦人が加入して、それが問題になつて、後に、集會條例の取締り上、黨員名簿から、警察署が削除を命じた、と云ふ位に、喧しかつたものである。

其他には、婦人公然、黨員に加はつた者は、一人もなかつた。

種々の關係から、自由黨の爲に、側面の運動をした者は、相當にあつたやうだ。多くは夫が、黨員であるといふ爲に、それに促されて起つたのであるが、今の参政權運動をして居る、婦人の立場とは、大分相違がある。村上の妻の如く、良人を促して、強烈な政治運動を、なさしめた者は、其他にも多少はあつたが、多くは世に知られて居らぬ。

三州豊橋に、村雨案山子と云ふ人があつた。是は撃劍の達人で、古武士の風のあつた人であるが、其妻は、却々の美人で、且つ雄辯家であつた。演壇に立つて、能く自由民権の爲に、巧みな演説をしたことがある。又大阪事件の疑獄に關係のあつた、影山英子、後の社會主義者、石川三四郎の内縁の妻、福田英子も、有名なものではあつたが、併

し是は、演壇に立つて、叫んだといふことは更になく、出獄の後、多少それに似た事もあつたが、其以前には、更に聞かなかつた。今は朝鮮の京城に居るが、元の代議士、新井章吾の妻が、矢張り容姿もよく、辯説も滑らかに、相當に活躍した。

演壇に立つて、自由民権主義の叫びを、最も強くやつた者は、最初の衆議院議長であつた中島信行の後妻、岸田湘煙女史であつた。此人は、但島豊岡の生れて、町家ではあつたが、相當の家柄に生れて、夙に俊才の譽れが高く、十五歳の時分に、皇后陛下の御前に、孟子の講義をしてから、非常に御氣に入られて、遂に宮中へ勤める、といふやうな事になつた。其後、宮仕へを辭して、民間に下り、盛んに漫遊を試みて、演壇の人となつた。江州大津の演説會で、官吏侮辱罪に問はれて、重禁獄の刑に處せられたといふ、履歷を有つて居る。多くの婦人が、徒らに氣ばかり強く、餘り讀書の上に、力のなかつた時代に於て、此人は、英語も漢籍も、共に堂に入つたもので、詩文章などは、既に一家を成して居た位で、姿が如何にも美しくして、態度の優雅びて居たにも拘らず、其言論は、甚だ強烈であつた。自由主義であつた爲に、政府の壓迫もひどかつたが、自由民権派の、此婦人を、尊敬することは一通りでなかつた。

同時に、其演説を、聴く者が、婦人の容姿に憧憬がれて、追ひ廻す者もあつた。萬一にも、身を誤るやうなことがあつては、折角の人物を、詰らない者にして、仕舞ふ虞れがある、といふて、中江兆民や、栗原亮一が心配して、當時、大阪に来て居た、中島信行が、妻を失うて、孤獨で居たのを幸ひに、其橋渡しをして、遂に結婚をなさしめた。著者が覚えてから、女流演説家として、或は婦人の自由黨とかいふて、政治論で騒ぎ廻つた者に、其素行の修つて居た者は、殆どなかつた。大概は、四人や五人の情夫があり、又本人が、品行を固くして居ても、周囲の男子が、それを、空しく許して置く筈もなく、株式會社のやうなものになつて、誰も彼も關係があつた、といふやうな、醜態の下に、生涯を誤つたものは、其例に乏しくない。獨り、中島湘煙女史だけは、さうした譯で、晩年は、中島男爵夫人となつた。

して、身を終ることが出来た。

村上の妻は、氣性の勝れた、確りものではあつたけれど、惜しい哉、文字に乏しく、従つて、強烈な議論はするが、理想の據るべき所は、更になく、只環境の刺戟から、自由黨に對して、強い信仰を有つて居た、といふに過ぎなかつた。

殊に、良人の泰治が、浦和事件で入獄して、自分も一時は、拘引の身となり、酷い目に遭つた爲に、其思想は、ますます過激になつて、政府に對する反抗の意は、大概の男も及ばぬ位、強いものであつた。是れと云うて、深い聯絡はなかつたのだが、秩父の山を廻つて、其方面に、始終往來して居た、村上の關係から、田代や加藤とも、一面の識があり、良人の仇討ちをしなければならぬ、といふ、單純な復讐心から、盛んに秩父方面に出没して、革命思想の鼓吹に努めた。田代や加藤も、學問から來た、纏つた思想とはないが、獨り政府者のみが、權勢を負り、飽食暖衣の中に、國民を虐げて居る、といふが如き、現實の事柄は、能く眼に映るから、そこで、何事か惹き起して、是等の官吏を戒めなければならぬ、といふ考が起つたのである。詰り、國定忠次が、岩鼻の代官を殺して、赤城山へ立籠つた、といふ筋を、其儘に行はうとしたのが、此二人の理想であつた。

村上の妻は、東京へ出て來て、大井憲太郎を訪ねた。其頃、大井は、銀座に事務所を開いて、多くの黨員を指揮して、盛んに活動して居た時代であるが、村上とは、豫ねての知己でもあり、且つ其妻が、一個の女丈夫であることも聞いて居たので、折角の來訪に、面會して見ると、意外千萬にも、盛んに革命論を唱へて、一舉にして藩閥政府を、倒す計畫を、何故に起さぬか、と云つたやうなことを、頻りに説き初めた。大井が、急激な改革論者であつたにも拘らず、却つて秩父山中の無名の婦人に、訪ねて來られて、革命論を吹掛けたのだから、流石の大井も、之には驚いた。

段々立入つて、其説く所を、聴いて見ると、議論としては左迄の値打もないが、多少據る所があつて、來たやうに

も思はれるし、又秩父方面には、強烈な自由黨の同情者もあるので、或は、それ等と、何等かの聯絡を、通じて居て一女子の身を以て、斯る過激な相談に來たのであらう、といふ、想像も起つたので、之を聞き流しに、打捨て、置くことは出来なかつた。

大井の配下に、氏家直國と云ふ人があつた。仙臺の舊藩士で、身長六尺以上、相貌魁偉、水滸傳中の人物に、能くありさうな、唯見てさへも恐しい、風貌體格の人であつた。腕力は、十人前位あつて、文字も一通りはあり、確かりした人物であつた。後に大阪事件で入獄し、刑期が満ちて出獄してから、大阪相撲の仲間に這入つて、新世界泰平と云ふ名で、土俵に上つたことがある。其頃の師匠が、東京へ來て、大關になつた朝潮であるが、僅かに二三箇月の修業で、土俵に上つた、氏家の力量は、實に驚くべきものがあつて、唯一場所、幕の内になつた、といふやうな譯で、一時は評判であつたが、固よりさうした事で、生涯を終る考へはなかつたから、間もなく廢めて仕舞つた。晩年は、壯士の頭になつたり、俠客の仲間入りをして、何時も新聞の材料を作つて居たが、遂に上海に渡つて、別に爲す事もなく、病死して仕舞つたのは、惜む可き事であつた。

大井は、氏家を呼んで、秩父方面へ、自分の代理として、遣はすことにした。「同方面の有志が、餘り輕卒なことをして、身を過らぬやうに、警告を與へ、且つ團體的運動を始めるにしても、東京と聯絡を附けてやらぬと、到底成功するものでないから、漸進にもせよ、將た急進にもせよ、何れにしても東京の同志が、どういふ風に動かか、この大勢を、見てから後に、事を起すことにしたら、可からう」といふやうなことを説かせる積りであつた。

氏家は、秩父へ、やつて來て、田代や加藤に、段々此事を話込み、それから多くの有志に會つて、極めて穩和な説を吐くと、既に計畫の大半が、成つて居た時であるから、有志の連中は、非常に怒つて、氏家を詰責する。甚しきに至つては、

「我々の秘密を探りに來たのみならず、弱い議論を稱へて、同志の決心を妨げるやうな者は、殺して仕舞へ」といふ騒ぎになつた。

其時に、氏家は、泰然として答へた。「君等の焦燥るのは、やがて、破れるの因であつて、あういふやうな考へては、迎も大事は成せるものでない、我輩は、身體も此通り大きく、爲ることも半間ではあるが、今日迄の經歷を言へば、嘗て陸軍の教導團に這入つて修業中、上官の命に反抗して、懲役に處せられ、それから、教導團を脱して、自由民權派の仲間入りをして、今日に至つたので、死を以て事を争ふ、事の點に於ては、諸君に、一步も譲らぬ考へである。併ながら、無謀の争ひは、暴虎馮河の勇であつて、眞に國家を憂ふる者が、執る手段でない、といふことを考へなければいかぬ。假に諸君が一致團結して、事を擧げるとしても、相手は政府なのであるから、相當の準備をして掛らなければ、之に勝つべき筈がない。政府には、憲兵もあれば、軍隊もあり、且つ警察もある、それ等の力が一つになつて、押寄せて來たら、五百や千の者が集つて、それと戦つた所で、勝つべき見込は立つまい。唯だ陳勝吳廣となつて、天下の人心に刺戟を與へれば、可い、といふのならば、それによいといふやうな、考へを有つて、事を起すのは、只だ人が集つたのみで、火繩銃の百挺や二百挺あれば、それでよいといふやうな、考へを有つて、事を起すのも、恰も猪狩をするやうなもので、到底左様な無謀なことには、同意出来るものでない。君等が、事を起すとしても、何を其旗幟にするのであるか、薩長二藩が、維新の大業を爲遂げ、徳川幕府を倒した時の旗幟は、攘夷勤王であつた、此旗幟の下に、遂に目的を遂げたのであるが、扱て、それから後に、果して攘夷を行つたか、と云へば、そんなことは更になく、徳川を倒して、自分等が、政權を握つた日から、外國人と、交際をして居るではないか、今から考へれば、甚だ矛盾したことであるが其當時としては、攘夷といふ旗幟の下に、多くの人を集め、それを勤王の二文字で引締めて、さうして徳川を倒した後に、攘夷といふが如き、馬鹿々々しい主張は抛つて、直ちに開國主義で、進んで行つた、といふ所に、面白味はあつたのだ。君等は、抑もどういふことを、旗幟にして立たうといふのであるか、

唯新政府が氣に入らぬ、といふだけでは、擧兵の目的にはならぬ。政府のどういふ點が悪いとか、縦し、その迄には議論が進まずとも、自分等は、斯ういふ希望を、有つて居るが、政府が、それを容れないから、事を起すのである、と、いふ位のことには、決して置かなければなるまい。其旗幟の下に、集つて来るものならば、主張があつて戦ふのであるから、縦し成敗は、何れに歸するにしても、歴史の上にも書かれるし、後世の人の批判も、さう悪く起つて来まい、と思ふ。どうせ腕力に訴へて、事を起さうとするのは、亂暴なのであるが、併ながら、其奥には、多少の道理と云ふものを、有つて掛からなければならぬ。君等に果して、どんな旗幟があるか、先づそれを聞いて見たい」と、氏家に、段々説かれて見ると、一同も力んでは見たもの、それに對する、相當の答辯は、誰も出来なかつた。此一事から、氏家を信ずることが、稍々深くなつて来て、それから氏家も、眞劍になつて、相談を受けることになつた。

大井は、氏家に、無謀なことをしないやうに、能く説諭して来い、と言つたのであるが、氏家は、それをやらせて見たくて、仕様がなかつたのであるから、止めるやうな煽てるやうな、両面から説きつけて、秩父騒動は、起させたのであつた。

氏家の説に基いて、此時に推し立てた、旗印は、第一が、地租軽減、第二が、徴兵令改正であつた。

其頃の政治問題としては、此位的好題目はなかつた。地方の農民が、窮迫の餘り、地租の軽減を希望することは、非常に甚しかつた。又徴兵に就ては餘り喜んで居らなかつた、人の弱點に乗じて、其根本を改正する、といふことを主張したのであるから、無智の良民は、之に向つて、集つて来るのが、當然であつた。

凡そ、二千五百人ばかりの人数が集り、それを軍隊の組織にして、明治十七年の十月下旬、秩父山中の大宮から、川越へ抜ける所の山間に、嶮を擁して、事を擧げたのである。それ等のことは、總て氏家が、陰に居て指揮をしたのであつたが、或は大井も、其議に與つて居たらうと、想像される。

加波山事件が、九月下旬に起つて、それが爲に、政府の浪浪は一通りてなかつた。事は僅かに、數日の間に済んだやうなもの、其遁れたり隠れたりして居る者は、未だ總て捕まつて居らぬ。人心が、何となく恟々として、政府も不安の念に、駈られて居た折から、引續いての暴動で、政府の浪浪は非常なものであつた。遂に、東京鎮臺の兵士を一部繰出して、其鎮撫に當るといふやうな事になつた。

集つた者の大半は、秩父山中の獵夫であつたから、舊式の火繩銃であつたけれど、狙撃が、却々に巧く、山間の嶮阻な道を、駈け歩くことは、恰も鹿と同じで、人間離れのした働きをした。最初の間は、岩角や樹の茂みに隠れて、遠くから狙撃を爲る。それには攻め込んで行つた、巡查や兵隊も、餘ほど苦しんだけれど、結局は、實力の争ひで、遂に一同は敗戦した。

田代加藤を初め、其他の重立つた者は、盡く縛に就いた。首領の二人は、裁判に於て死刑になつたが、配下のものも、それ程、重刑に處せられた。

此事件の會計掛をやつて居た、井上傳藏が、うまく通れて、三十幾年の間、北海道に居て、妻子まで有つて居たが、いよいよ死の際に、一身の祕密を打明けて、新聞紙上を、賑はした事もあつた。



# 特殊の國事犯

## 浦和事件と大阪事件

自由黨員の犯した、政治に關する犯罪は、今迄に國事犯事件として一通り解説したが、夫れ以外に、特殊の事件が二つあつた。其一つは浦和事件で、他の一つは大阪事件である。先づ浦和事件の方から説く事にしよう。前回迄に述べた、國事犯は、總て政府顛覆を目的とした、大掛りの陰謀であるが、獨り浦和事件は、其れと全く相異して、唯一人の國事探偵を、慘殺した爲に起つた、疑獄である。西洋の探偵小説に、能く見るやうな事件と云へば是より外にはない。

其頃の政府は、最も過激な思想を有して、場合に依れば、命がけて政府に反抗しようとする、意氣組を持つて居た、自由黨員を、殊更に刑に觸れさせて、之を獄に投じ、其同志を苦めて、禍ひの根を絶たう、と企てたものだ。其手先になつて、働いた者が、當時の警視廳であつた。其手段の卑劣なる事は、昔の陸引が、よくやつた方法と、更に異なる所がなかつた。元來、警視廳は、國事犯取締の爲に起つた者で、今のやうに、拘摸や淫賣の尻を、追ひ廻すやうになつたのは、グツと後の事で、其建設された初めには、全く國事に關する、取締の官廳とされてあつた。

其れであるから、今でも、警視廳の内部に於て、一番に勢力のあるのが、國事係で、澤山の機密費なるものは、多く其れに向つて、支出されて居る。斯ういふ官署を設けて、取締するのも必要ではあらうが、それと同時に、非常な

る弊害が伴ふ事も考へなければならぬ。その役目に當つて居る、小さい役人が、自分の働き振を示す爲めに、左までもない事件を、殊更に、世間に響かせて、己れの手柄を現はさう、として謀る事が往々にしてある。例へば、全國を通じて、五十人か百人もあれば、せい／＼だと思はれる、共產黨の十人も捕ふれば、翌日の新聞紙上に、二號活字の見出して、大袈裟に其顛末が記載される。其原稿の材料は、皆警視廳から出て居るのであるが、唯其記事を見れば如何にも全國に亘つて、共產黨が、澤山居るやうに見えるけれど、實際に於ては、ホンの指を折つて算ふる位の者である。警視廳では、それを大袈裟に響かせなければ、自分の働き振が、上官に見えぬので、自然さう云ふ事をする。それが、知らず／＼の間に、却て共產黨の宣傳となつて、頭の淺薄な、若い連中が、一冊か二冊の、西洋の書物を読んで、物珍しげに、共產主義を、稱ふる者が起つて來るのであるから、つまり云へば、警視廳が、共產主義の宣傳をして居る、といふ結果になるのだ。斯うした遣り方は、甚だ面白くない。

爾う云ふ者を、捕へた場合には、極めて秘密にして置いて、假りに其顛末を發表するとしても、極めて小さく取扱つて、報告するのが可い、とは、思はぬか。共產主義の本家本元たる、露西亞ですら、レーニンの逝つた後は、部分的に、私有財産の制度を、認めるやうになつて居るではないか、と言つたやうな宣傳をすれば、多少の效能もあらうが、今のやうな遣り方は、却つて、之を大きくする結果を見るばかりで、百害あつて一利のない、遣り方である。

昔の自由黨員が、過激な話でもするとか、或は何か仕事でもせんとすれば、警視廳の役人の爲に、嚴重なる取締をされて、或は獄に投ぜられ、或は刑場の露と、消えた者もある。其れ等のものが、果して悔悟したか、と云へば、更に悔悟する所もなく、出獄後も相變らず、其前と、同じ行動を取つて、政府に反抗して居る。其結果が何うなつたか、と云へば、遂に政府は、それ等の事に恐れて、法律を作つて抑へよう、としたけれど、毫も反省したものはなく、却て、議會を開く事になつた。警視廳が使つた密偵のうちで、代議士になつたものもあり、今は議會に立つて、天下の政權に參與する、といふが如き、奇觀を呈して居るではないか。

斯ういふ次第であるから、思想から起つて来る、或る行爲は、之を取締るのに、餘程考へなければならぬ。警視廳の機密費なるものは、比較的多くあつて、殊に其仕拂を、明細に報告する必要がない丈に、誠に使ひ易く出来て居る。斯うした性質の金を、巧みに使用すれば、確に效能があるだらうが、又一方から見ても、是れ程害の伴ふものはない。昔は、自由黨員が、激しい議論を宣傳するのが、國家に大なる弊害がある、といふ事にして、黨の内情を、知りたいが爲に、機密費を散じて、或者を買収し、黨内の秘密を、警視廳に密告させる、といふ遣り方を、執つて居たのだ。昔の奉行政治の時代に陸引なる者が、與力や同心の指圖の下に、掏摸や小泥棒を、手先に使つて、大きい泥棒を捕へる、といふので、それが爲に利益する所もあつたらうが、却つて弊害の大きいものがある事には、更に氣が付かずに居た。それを其儘に踏襲したのが、警視廳の遣り方であつて、甚だ感服出来ぬ。

今でも警視廳では、此陸引主義を奉じて、相變らず舊式の遣り方を、執つて居る。例へば、府會議員の中に、極めて卑しい奴があつても、取締に手加減をして、私恩を賣つて、巧みに之を、手先に使つて、自分の便利に働かせる、といふやうな事は、始終ある事であつて、別に珍しくもないが、爾うした事をする爲に、警視廳の益する所もあるだらうが、之れが爲めに、政治を頹廢させるに至つては、容易ならぬ事である、といふ點には、少しも氣附いて居ないのだ。尤も、警視廳の役人は、三年と續いて居ないから、跡は、野となれ、といふ考へから、斯うした捨鉢の遣り方をするのかも知れぬが、人民に極めて、密接の關係を有つて居る、役所の仕事としては、決して輕視する事は出来ぬ。

明治十五年から七年にかけて、若い自由黨員の中で、相當に名を知られた者に、照山俊三なるものがあつた。非常な慷慨家で、苟も議論が、國家の事に及べば、涙を流して、人の心を動かすやうな、激しい議論をして、常に虛無黨や、無政府黨の事などを、例に引いて、過激な議論をして居たものだ。演説會などに出れば、大概は、臨監の警官から、中止されるやうな演説ばかりして居て、照山と云へば、すぐに過激派である、といはれた位であつた。

然るに、此照山が、警視廳の内意を受けて、自由黨の内情を、搜つて居た一人である、といふ事が、様々の事情に

依つて、漸く判つて來た。それを憤慨して、秩父の山中へ追込み、村上泰治、岩井丑五郎、南關藏など云ふ連中が、遂に村上方の湯殿に於て、慘殺して仕舞つた。

其背後には、宮部襄が潜んで居て、それとなく、暗殺を勧めた、といふ事實もあつた。宮部の事は、前にも述べたから、今は之を略す事にするが、兎に角、其時分の幹事としては、自由黨中に於ても、信用の厚い、多方面に亘つて、交際の廣かつた人である。照山を、湯殿に於て殺し、其顔の皮を剥ぎ、之を俵に詰めて、丑五郎が、背負ひ出して、人通の少ない、秩父の山中へ捨て、來た、と云ふのだから、随分思ひ切つた事をやつたものだ。

元來が、警視廳の探偵であるから、照山の行方が不明になつた、といふので、之れには仔細があるだらう、と、警視廳では、手を替へ品を代へて、搜索に従事した處が、埼玉縣の本庄町から、兒玉町へ行く途中までは、照山の通つた事が判つた、けれども、夫れから先きは、少しも分らなくなつて仕舞つた。村上の屋敷へ、誘うて行つて殺したのだから、容易に判る譯はなかつた。

搜索の結果、村上等の行動が、甚だ怪しい、と睨んで、搜索の手を進めて行くと、照山の屍體を捨てた山中を、狩人が通過する時、その屍體を發見したので、其れから大騒ぎになつて、よく調べて見ると、顔の皮が剥いてあるから、何ういふ人であるか、よく判らないが、併し、頭髪の白い所から、約を照山だ、といふ事に、目星がついた。年齢は、二十を越して幾つでもなかつたが、頭髪は、既に眞白くなつて居たので、此特長は、如何ともする事が出来なかつた。種々の證據を集めて、是れは、村上等が、殺したのだと云ふ事が、稍判つて來たので、終に逮捕の巡查が、村上の邸へ乗込んで來た。逸くも夫れと知つた、村上、南、岩井等は、短銃を放ち、刀を振つて、捕吏に對抗して、非常に奮闘した。村上と岩井は、其間に、一方を切抜けて、逃げて仕舞つた。

村上の妻は、大概の男子も、及ばぬ働きをして、捕吏の行動を妨げた、といふので、其場から連れられて、警察の訊問を、受ける事になつた。

是れが浦和事件の概要であるが、結局は、宮部襄、長坂八郎、深井卓爾の三人も拘引せられて、逃げたものも皆な捕へられた。裁判の結果は、村上の牢死に依つて、多く其證據を失ひ、岩井は十五年、宮部は十三年、深井が十二年、長坂は無罪放免になつて、一先づ落着にはなつたが、唯驚くべきは、此事件に就て、宮部は、三年間、未決監に居て、唯二回の訊問を受けた限りで、捨て置かれたのだ。六疊の部屋に一人で、三年も坐つて居ると、風が馴れて、膝や肩に甌上るやうになる。共犯者が、みな確かりして居たので、宮部に觸れた陳述が、頗る有利であつた。それが爲めに、未決監に長く繋ないで、徒らに苦しめたのである。

宮部は、一旦、豫審免訴で出獄した。自由黨の幹事、加藤平四郎が、發起人となつて、井生村樓に、慰勞會を催した。それから間もなく、また拘引されたのである。村上の死に依つて、岩井の陳述が、一變した爲めに、再び捕縛されて、浦和の盛獄に繋られ、今度は、有罪の豫審終結を得て、公判に廻はされた。辯護人の林和一が、一事再理は、法理の許さぬ所である、というて、再上告までやつたが、終に採用されず、宮部は、岩井等と共に、北海道の獄に送られて、此事件は落着を告げた。

政府を倒すとか、大臣を殺すとか云ふ事からでなく、唯一人の探偵を殺した、小さい事件ではあつたが、其頃には浦和事件として、有名なものであつた。其れと對照すれば、餘程事件の規模も大きく、殊に、其れが對外關係になつて居たので、甚だ興味のあつたのが、大阪事件であつた。

明治十七年、朝鮮の京坂に、變亂が起つて、我が公使館が焼打され、竹添公使は負傷して、日本へ引揚げて來た。夫れに憤慨して、自由黨の大井憲太郎、小林樟雄、新井章吾、磯山清兵衛等が、騒ぎ出したのが、此事件を、産み出した原因である。尤も、朝鮮の事變は、是れが始めてでなく、毎年のやうに、小さい事はあつたのだが、公使館まで焼打された、大きい事件は、明治十五年に一つあつて、更に十七年に起つて來たのであるから、此時には、日本全國の輿論が、征韓論に傾いて、人心の激昂は激しいものであつた。

大井は、關八州の黨員を抑へて、自由黨中の有力者であつたから、一たび大井が、手を擧ぐれば、決死の壯士が、百人や二百人は、直に集まる、といふほどの勢を有つて居た。其頃には、銀座に、法律事務所を開いて、業務も盛んであつたが、何しろ政黨運動の方に、身が入つて、事件を、粗略に扱ふので、追々に、依頼者も減じ、収入の金は、總て政治運動の方へ向けられる、といふ譯で、業務の繁昌する割合に、貯蓄のなかつたばかりでなく、却て借金で、頸が廻らぬ、といふ有様であつた。

貴族院議員になつて死んだ村野常右衛門は、大井の配下であつて、森久保作造も、神奈川縣の自由黨として、大井派になつて居た。小林は、岡山縣人で、元と佛蘭西公使館の通譯として、學者肌の人であつて、政治運動などに没頭する人ではなかつたが、朝鮮事件に就ては、非常に憤慨して、大井と肝膽相照らし、遂に此事件を企つるに至つた。朝鮮政府の背後には、支那政府が、控へて居て、總ての事に、干渉を加へ、朝鮮政府は、恰も支那政府の、出張所の如き觀があつた。日本政府が、朝鮮に對する政策の、何時も破れるのは、是れが爲めであつて、さうした事情のある爲めに、大井等の憤慨は、一層激しくあつたらうが、公使館の役人を殺され、居留の日本人民が、其被害を蒙つた、といふやうな事は、日本帝國の恥辱であつて、之をも忍ぶべくんば、天下何物をか忍ぶべからざる乎、といふ議論で、非常な覺悟を以て、此事件を、企つる事になつたのである。

全體、何ういふ事を、大井等は仕ようとするか、と云へば、先づ配下の壯士や同志を、朝鮮へ送り出して、其政府の大官で、支那政府に通じて居る者を、片端から打倒し、支那政府と、朝鮮政府との間に、大衝突を起して、朝鮮の獨立を確保し、日本政府が、其後援者となつて、支那政府の勢力を、朝鮮入道から、驅逐して終はせよう、と爲るのが、其目的であつた。

そこで、大井は、總大將格で、小林の參謀長、新井章吾と、磯山清兵衛等が、百餘名の壯士を率ゐて、先づ朝鮮へ乗込み、事を擧げる、といふにあつて、跡の同志は、内地に残つて、運動費を調達する、といふ風に、夫れ／＼役廻

りを定めて、事件は、だん／＼に進んで来た。

現代の政界にあつては、廉潔なる政治家として、反對黨にまで、崇敬されて居た、村野常右衛門に、強盜幫助或は強盜教唆などの罪名があるのだから、誠に變なものだ。後には、富山縣の代議士になつて死んだ、稻垣示といふ人があつたが、向島に、別荘を持つて、此處に、多くの壯士を養ひ、窃に大井と相應じて、事を成さんと計つて居た。稻垣の邸へ行くと、廊下や座敷に、爆裂彈の鐘が、ゴロ／＼轉がつて居て、實に凄いものであつた。朝鮮へ押出すには何うしても爆裂彈の力を俟たなければならぬ、といふので、爆裂彈を製造して、築地の有一館へ運んで、之を船積みにして、大阪の新井章吾の手許へ送り、新井と磯山とが、之を受付けて居たのだ。

社會主義者の石川三四郎と、夫婦のやうになつて居た、影山英子は、岡山の出身で、相當の資産家の娘であつたが高知縣人の阪崎斌の許に通つて、漢籍の修業をして居た。阪崎は、板垣の秘書役であつたから、英子は、何時か知らず、自由黨の人と懇意になつて、それから此事件の仲間入りを爲るまでになつたのである。

其時分には、二十二三で、敢て美人と云ふのではないが、一寸濼皮の剥けた、日本人好きのする、丸顔のポチャボチャした縹緞が、大に同志の目を惹いた位であつたが、妙齡の婦人が、稻垣の家から、爆裂彈を、築地の有一館へ、運ぶ役目を引受けて居たのであるが、何と恐ろしい事ではないか。

後には、本所區長になつて、政黨の事などは、一向に知らぬ、といったやうな顔で、すまし込んで居た、霜島幸次郎は、此事件について、爆裂彈の製造方を、引受けて居たのであるが、同志の田代秀吉と共に、その製造所を、本所の相生町邊に選んだが、それから四十餘年、其區に區長となつて居たなどは、可成りに世間を茶化したものだ。

然るに、此事件が、段々に進行して行く中、何時か、政府の知る所となつて、探偵が、頗る嚴重になつて来た。自分等が、法律の裏を潜つて、窃に計畫して居るので、探偵の追究が嚴重になれば、夫れだけ計畫する事の那邊かに、之れが觸れて来るから、さては、政府の方で、感附いたかも知れない、と思ふやうになれば、一日も早く、事を起す

に限ると焦り氣味にもなつて、準備は、存外に進んで行つた。

此事件に附帯した、強盜の中で、最も面白いのを、一つだけ述べて置かう。

大和の信貴山に、千手院と云ふ寺がある。何を祀つてあるのか、能く知らぬが、其祭日には、非常な賑ひで、參詣人が群をなして行く。大阪方面では、評判の寺院であつた。

關西方面へ乗出して、軍用金徴發に、掛つて居た、一列の中で、氏家直國を首領とした一組が、此千手院を襲つて祭日の賽錢を掠奪しよう、と企て、或夜、手を分けて押込んだ。一日の賽錢が、少くも千圓以上ある、といふ見込で這入つて見ると、案外にも、其日に、大阪の銀行へ、既に預け済みになつて、住職の手元に、残つて居るのは、五十圓足らずの端錢であつた。そこで、此連中が、坊主を縛つて置いて、議論を始めたのだから、實に面白い。

住職の出した五十圓を、持つて行かうか、夫れとも持つて行まいか、といふので、議論を始めたのである。「吾々の目的とする所は、千圓以上の金を取る、といふのにあつたから、五十圓許りの端金を取る、といふ事は、本來の目的でない、這麼なものには手を附けずに、行くのが宜い」

と云ふ説と、

『本來の目的であつた、大金は手に入らずとしても、此處に来るには、相當の入費もかゝつて居る事であるから、持つて行かう』

と云ふ事を、稱へる者があつて、大議論を惹起したが、遂に此金は、持つて行かぬ、といふ方が、勝を制して、引揚げに掛つた時、火の番が、騒ぎ出した爲に、附近の村民が二三百人、各々獲物を携へて、千手院の表門から、裏門を取巻き、其中には巡査も交つて居て、非常な騒ぎになつた。

此時に、秩父暴動の中から、縛を逃れて、此仲間に入つて来た、落合寅市と云ふ男があつて、是れは非常に擔力があり、殊に力の強い所から、眞先に乗出して、群衆の中へ斬り込んだ。其勢に怖れて、一同は四方へパツと散る

其間に、同志は、悉く逃げ去る事を得た。

一里餘といふものは、息もつかずに駆けて来たが、段々集まつた者を、氏が、數へて見ると、唯一人不足して居る、そこで氏は、頗る弱つた。萬一の場合には、氏が笛を吹く、其れを合圖にして引揚げる、といふ事になつて居つたのだが、流石の氏も、遁る方に、氣を取られて、笛を吹くのを忘れた、といふ事を思出したのであつた。然るに、其合圖をせずに引揚げた爲に、同志が一人でも、縛されるやうな事があつては、先輩に申譯がない、といふので、此連中が、更に引返して行つたが、幸ひ取残されたものは引上げて来たので、夫れ、道を分つて、大阪へ、引揚げて来た。

是れが、後に公判になつてから、千手院の住職が、證人として呼び出された時、其陳述が、頗る善かつた。其れは五十圓の金を、持つて行くのが正當であるか、或は持たずに行くのが宜いか、といふ争ひをして居たのを聞いて、是れは普通の賊ではない、と考へたので、其證言は、すべて被告の利益となつた。二人以上が共謀して、兇器を携へて強盗に這入れば、無論無期徒刑であるのが、何れも十年以下の刑であつた、と云ふのは、全く是れが爲めである。

爆裂彈の用意も、辛うじて調ひ、渡鮮の費用も、左までに豊富と云ふのではないが、一通り調うたから、新井章吾が先手になつて、朝鮮へ行く事になり、長崎まで、やつて来た處が、後から送るべき、約束の金が來ないので、渡鮮する事が不可能になつたのみならず、多くの爆裂彈が、何處へ行つたのか、更に届いて來ないから、大阪へ電報を打つて、照會して居る中に、事件が露顯して、遂に一同は、縛に就く事になつた。

之に就ては、磯山清兵衛が、大阪新町の藝者と深くなつて、醜名を流した事はあるが、併し、此人は、茨城縣の酒造家の主人で、相當の資産もあるし、人物も、可なり大きい所があり、自由黨本部の幹事にもなつて、左まで品格の悪い人ではなかつたが、利害を見る事が早く、此事件の恐らく成立しない、といふ事を見越した結果、厭氣がさして逃げ腰になつたのだらう、と思ふが、何れにしても、自分一人が、其仲間を脱けようとして、其道連が藝者であつ

た、といふ事だけは、餘り褒めた話ではない。夫れであるから、公判になつた時、神奈川縣の武藤角之助が、磯山の眉間を打割つて、大騒ぎをやつた事がある。武藤は、金子と改姓して、今では藤澤の町長をして、頭髪の尖は、白くなつて居るのだから、往時を想ふと、一種の感慨にうたれる。

此事件は、内亂陰謀罪でなく、外患に關する、罪といふ事であつて、大井以下の百名許りの人は、悉く有罪となつた。その中には、上告した者もあつたが、總て棄却になつて、皆懲役に服する事になつた。

大井は、自由黨の先輩として、五本の指に折らるゝ程の人物であつたが、出獄後の凋落は、實に甚だしいもので、其晩年の悲惨であつた事は、大井の死んだ時分に、新聞の雜報記事が、十行以内で、濟まされた事に、徴しても判る。若し此事件が無くして、自由黨の爲めに奮闘して、政界に、其盛名を續けて居たならば、衆議院議長位にはなつたであらうが、此事件の爲に挫折して、出獄後は、右に左に、其所屬が代り、果は自由黨の立場から、改進黨の方へ、飛び込んで行つて、衆議院の副議長としての候補者には、擧げられたけれども落選した。夫れから後は、幾度争ふても遂に代議士にさへ爲り得ず、全く世間から忘れられて、誠に寂しい晩年を送つたのは、如何にしても氣の毒千萬の事である。

昭和四年三月十日印刷  
昭和四年三月十五日發行

伊藤痴遊全集 第十卷

(品 賣 非)

著 者 伊藤仁太郎

發行者 下中彌三郎

印刷者 瀧川 薫

發行所

東京市麹町區下六番町一〇  
振替東京二九六三九番

株式會社

平

電話九段

三三一

六四六

四七六

七五四

番番番

凡

社

本製社會名合本製協三

行印社會式株刷印同共

15  
16  
17  
18  
19  
20  
21  
22  
23  
24  
25  
26  
27  
28  
29  
30  
31  
32  
33  
34  
35  
36  
37  
38  
39  
40  
41  
42  
43  
44  
45  
46  
47  
48  
49  
50  
51  
52  
53  
54  
55  
56  
57  
58  
59  
60  
61  
62  
63  
64  
65  
66  
67  
68  
69  
70  
71  
72  
73  
74  
75  
76  
77  
78  
79  
80  
81  
82  
83  
84  
85  
86  
87  
88  
89  
90  
91  
92  
93  
94  
95  
96  
97  
98  
99  
100

560  
42

合  
圖

合

圖

合

圖

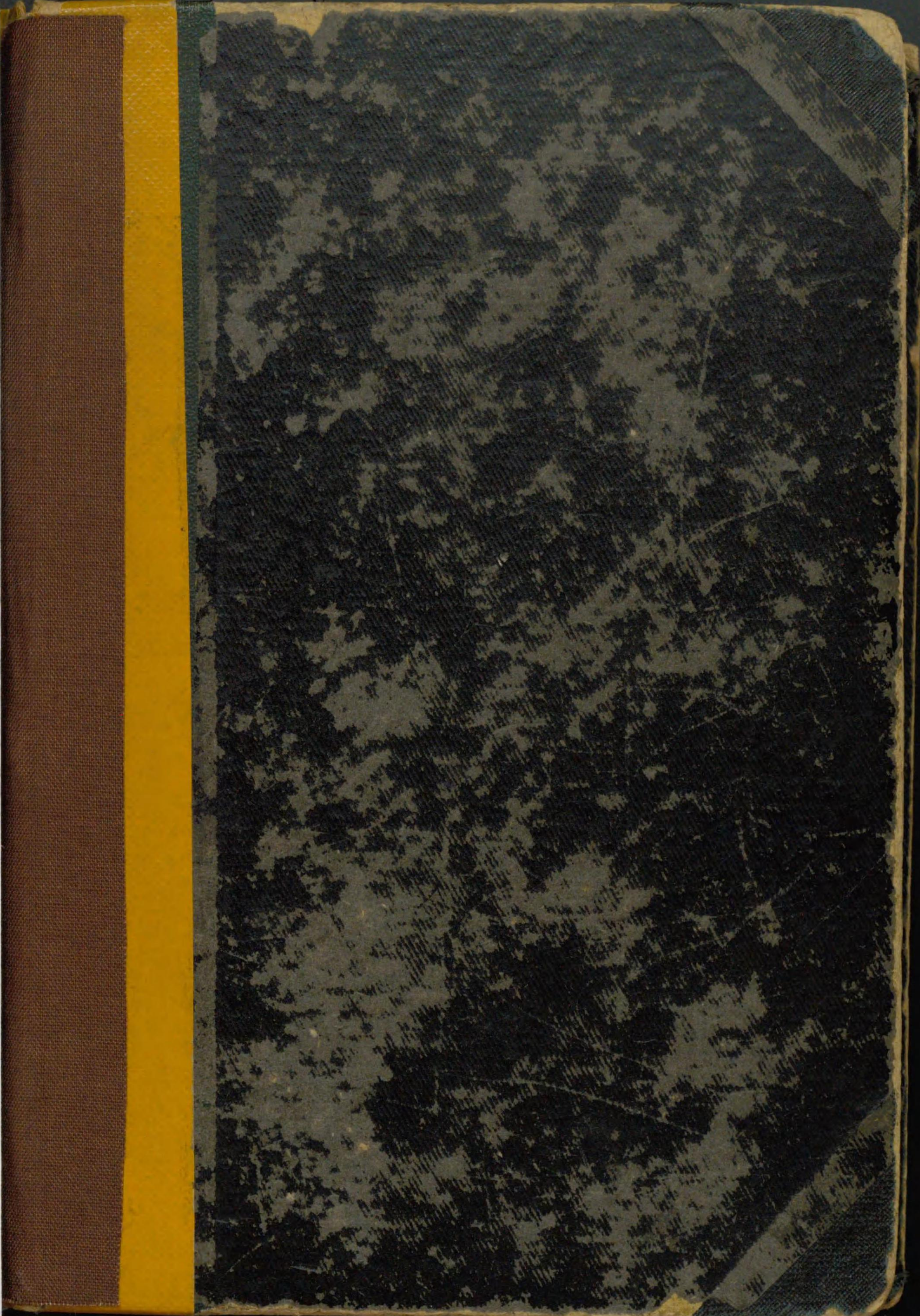
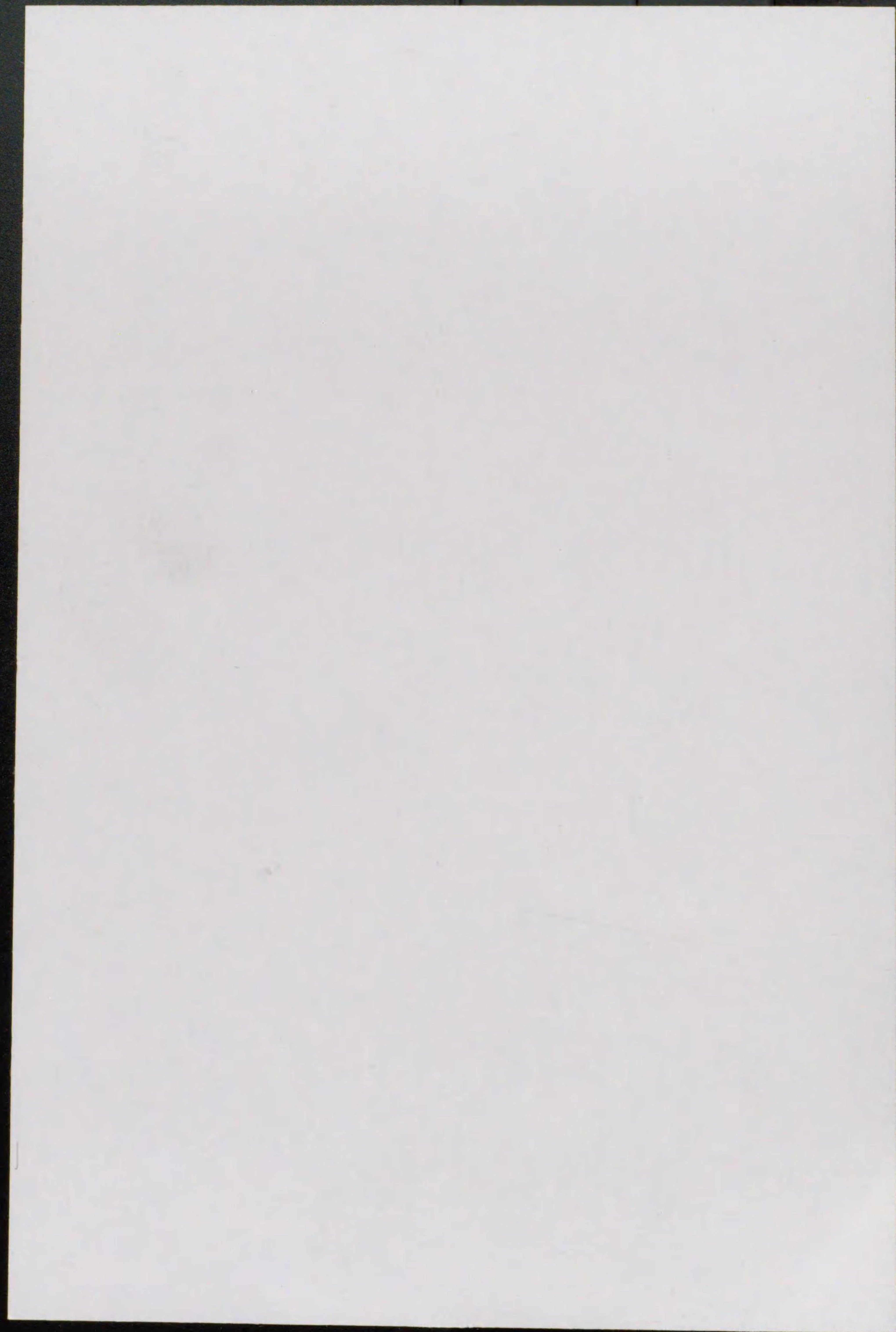
合

圖

圖

入館  
書目



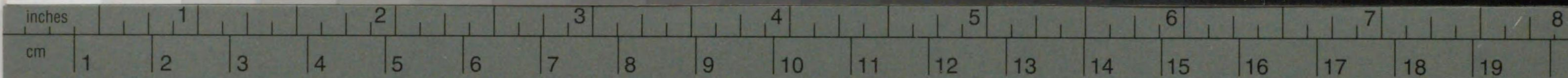


# Kodak Gray Scale



© Kodak, 2007 TM: Kodak

**A** 1 2 3 4 5 6 **M** 8 9 10 11 12 13 14 15 **B** 17 18 19



# Kodak Color Control Patches

© Kodak, 2007 TM: Kodak

Blue Cyan Green Yellow Red Magenta White 3/Color Black

